

Special Essay

「絵手紙」

医学部看護学科

中島 洋子

紅葉も終わろうとするこの秋、学生とともに「絵手紙の教室」に参加させて頂きました。落ち葉や柿などの季節感あふれるものをモチーフに絵を描きます。学生は線描き用の筆に青墨をつけ、筆をまっすぐに立てて持ち、和紙に線を描き始めました。線の引き方の練習はしたものの、葉書きにぶっつけ本番に輪郭を描きます。モチーフをよ〜く見て、自分が感じたまま自由に肩の力を抜いて描きます。私は見ているだけでしたが、彼らは描くことだけに集中しています。絵手紙は「へたでいい、へたがいい」というキャッチフレーズです。ちょうど2枚目に柿を描く時、どこからカキ始める？と指導の先生から尋ねられ、へたからがよさそうですと、大きく描き始めたのも面白いですね。たっぷりとした絵を描くために、下敷用の紙にはみ出して描きます。一つ一つの線が細かったり震えていたり、人それぞれです。次に色を付けていきます。紅葉の染まった色の濃淡を付けていきます。和紙に色がにじみ、混ざり合っていくのも自然に任せて、あるがままです。ここにもその人らしさが表れます。色が入ると命が宿り、描いた落ち葉も美しさを増して息を吹き返した感じです。このカエデの種類はコハウチワカエデという葉で、緑の葉が黄色からワインレッドまで、さまざまな色に染まり楽しませてくれます。

最後に短い言葉を添えます。ここで、はっきりとこの絵手紙を誰に宛てるのか決め、何を伝えるのか、言葉を選びます。絵と向き合い、自分と相手を通して、自分の中にある言葉を素直に選びます。短い言葉にするからこそ、素直な気持ちが出てきます。

橙色や赤のカエデの絵に添えて、「きれいな季節」「元気？」「もうすぐ、帰るね。」「頑張らなくて良い。」など、それぞれの思いが綴られていました。出来上がったばかりの絵手紙を眺めていると、眼がしらが熱くなり涙ぐんでしまいました。宛て主の方の気持ちはいかばかりでしょう。教室の方々も、送る相手のことを思いながら、1枚1枚手作りの絵手紙を描いて、お仲間との会話も楽しみながら、とてもステキな時間を過ごされていました。ここでは、中年の方から90歳代の方々まで、どなたも素晴らしいチャレンジをされていて、地域の方々の生活の1コマをご一緒させて頂き、人と自然とのつながりなど味わえるととても豊かな時間でした。慌ただしい日々の中、こんなひと時が、私にはとても癒しとなり、明日への元気と勇気を頂きました。

